

の発言について、まったく相手が言っていないことを報告書に書く、つまり百パーセントのウソをつくなどということは、絶対にありえないからです。

ですから、そうした都合の悪い部分はおそらく削除した上で、しかし前半の二枚は、「大平はライシャワーから、アメリカ側の解釈を聞いた」

という256ページ①の内容だけでなんとか完結させ、後半二枚の、

「外務省内の過去の資料を調べたが、ライシャワーの見解を裏づける事実はなかった」という内容(同②)の「別の文書」につなげる必要があった。

しかし前半の一枚め(↓35ページ)には決裁欄のサインや「回覧番号」などが書かれているため、手を加えることはいっさいできず、二枚めでむりやり字詰めを広くして、削除した分のスペースを埋めなければならなかった可能性が非常に高いと私は思います\*。

\* 同文書一枚めの決裁欄左上を見るとわかるように、「大平」外務大臣の印鑑が一度押されたあと、線で消されて、菊地清明・大平外務大臣秘書官の「菊」の字(高橋准教授・同前による)と、「了」の字によるサイン(決裁)が書かれています。おそらく文書の改ざんにともない、大平は関与させない形での調整が行われたのでしよう。

なぜ半世紀たっても、誤りを認められないのか

この経緯を具体的にたどってみて、私はむしろ牛場と東郷に同情したくなりました。

もし私の推測どおり、彼らが立てた戦略のもとでこの時期、改ざんが行われていたとしても、「緊急避難的な措置だった」という情状酌量の余地はあるかもしれません。またこれほど時間がなければ、「東郷メモ」の内容に複数のまちがい(↓276ページ)があったことも批判する気にはなれません。

しかし、そこで逆に最大の問題として浮かび上がってくるのは、このとき冷戦の真ただ中で緊急避難的につくられた「さいあたり」の方針と、おそらく「歴史の改ざん」を、半世紀たってもまだ日本の外務省が金科玉条のごとく守りつづけているという事実です。

そもそも二〇一〇年という、東西冷戦が終わってから二〇年もたった時代に大規模な調査を行いながら、誰もがあることをわかっているアメリカとの軍事上の密約について、「厳密な定義では、密約は存在しなかった」

などという、国外では絶対に説明不能な報告書(有識者委員会報告書)を書き、それを強引に押し通す必要が、どこにあったのでしょうか。

第二章で触れた村田元外務次官の遺言である、

「政府の国会対応の異常さも一因だと思ふ。いつ、べんや、った答弁を、変えることは許され

『知らずにはいけない 2』(矢部宏治; 講談社現代新書)

ないという変な不文律がある。謝ればいいんですよ、国民に。微妙な問題で国民感情もあるからこういう答弁をしてきたと。そんなことはないなんて言うもんだから、矛盾が重なる一方になってしまった」という言葉が何度も頭をよぎります（152ページ）。

\* 「東郷メモ」のなかの表現1275ページ。

「書物が焼かれるところでは、やがて人間も焼かれるようになる」

この点がおそらく、われわれ日本人の抱える最大の欠点なのでしょう。誰もがウソであることを知っているのに、どうしてもそれを止めることができない。

私たちの国は、なぜか他の国に比べて、ジャーナリズムもアカデミズムも、きちんとそうした問題を批判する力が極端に弱いのです。

「密約研究の父」である新原昭治さん以外に、この二〇一〇年の外務省の密約調査における「有識者委員会報告書」に対して、真正面から批判をしている人を私は長らく知りませんでした。今回ようやく見つけましたので、ご紹介しておきます。

大平・ライシャワー会談のところで著書から引用させていただいた、共同通信の記者で、事前協議制度についてのすぐれた著書（『日米安保と事前協議制度——「対等性」の維持

装置』吉川弘文館）のある豊田祐基子さんです。豊田さんはこの「有識者委員会報告書」について、非常に簡潔につきのよう書いています。

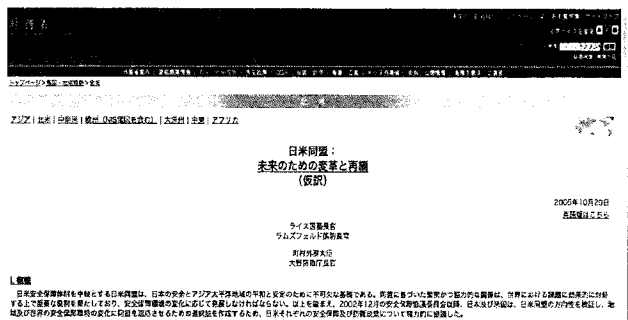
「約50頁にわたる報告書を手にした筆者（豊田氏）は暗澹たる思いに捉われている。そこに提示されていたのは密約を結び、引き継いできた責任を回避したい一心の外務省のシナリオに沿った「厳密に言えば密約は存在しない」という詭弁に過ぎなかったからだ」（『密約』の半世紀と日米安保『日米安保』とは何か『藤原書店所収二〇一〇年』）

本当にその通りなのです。少しでも勇気をもって批判する姿勢さえあれば、非常に単純な話なのです。

歴史を真正面からねつ造する行為と、それに対し口をつぐむことは、共に歴史資料を廃棄する行為に等しいと私は思います。日本は戦前それで一度、国を滅ぼし、そしていま、みなさんよくご存じの通り、安倍政権のもとで、まったく同じ過ちを繰り返そうとしているのです。

「書物が焼かれるところでは、やがて人間も焼かれるようになる」

ハイネの戯曲『アルマンゾル』のなかの有名なこの言葉を、いま私たちは真剣に思い起こすべきなのでしょう。



「日米同盟：未来のための変革と再編」(仮訳) (外務省HP)

### 密約が生んだ自発的隷従状態

こうして密約という「国民へのウソ」をきちんと清算できず、その記録を改ざんしたり文書を捨てたりしたあげく、ついには自分たちでもわけがわからなくなり、いつアメリカ政府から「その条文の解釈はまちがっている」といわれるか、まったく予想がつかなくなってしまう日本の外務省は、ついに次のような非常に恥ずかしい、しかし実用的な解決策をとるようになったのです。

それは、「日米間の重要な取り決めについては、英語の条文だけが正文で、日本語の条文はすべて「仮訳」という暫定的なものとする。しかし暫定的というのはあくまで建前で、永遠に正文はつくらない。そしてもしもアメリカ側から「その解釈はちがう！」とい

われたら、いわれた通りに日本語の条文の仮訳を変更する」という解決方法です。

その結果、現在では国家の命運を決するようなアメリカとの重要な合意文書が、どうとうと外務省のホームページに「仮訳」と表示されているついでに、右ページ上。そして、ただすべてがアメリカのいいなりという、世界でもただ一カ国だけの恥ずかしい「外交方針」ができあがってしまったというわけです。

### 理不尽なゲームでは頑張れない

「なぜ密約はダメなのか」という根源的な問いへの答えは、ひとつはそのように、「それが自発的な隷従状態を生み、国家の主権を失わせてしまうからだ」といってよいでしょう。

知らないルールがたくさんあって、いくらがんばっても突然その知らないルールを持ち出され、せっかくの得点を無効にされてしまうような理不尽なゲーム。そんななかで闘争心を持って戦いつづけることなど、もちろん誰にとっても不可能です。

だから交渉担当者(≠外務官僚)が無力感にとらわれ、しだいに最初から争わず、自分から相手(アメリカ側)の意向を先まわりして推測し、それを丸のみした方がよいという

ことになってしまふ。

激しく交渉することはせず、適当に戦っているふりをしながら、うまく負ける。相手が花を持たせてくれる場面では少し攻めこんでみせるが、攻めてはいけない場面では最初から絶対に議論をしない。

「なにをやってもムダなんだ。とにかく逆らうな」

しかしそうした交渉態度は結局、アメリカ側担当者の軽蔑をまねき、さらなる悪循環を生んでいくことになるのです。

#### 記憶をなくした国

もうひとつは、もつと深刻な問題です。

アメリカ政府と数多くの重大な密約を結び、しかしその存在を否定して過去の資料を捨てつづけた結果、日本はいわば「記憶をなくした国」になってしまったのです。それは同時に、日本がアイデンティティ（自己同一性）を喪失した国になってしまったということでもあります。

考えてみてください。そもそもすべての人間にとって、アイデンティティのもとにな

るものは過去の記憶です。

「自分はこういう性格の人間なのか」

「自分はこういう生き方をしたいと思っっている人間なのか」

「自分はなにを大切に思い、どういうときにどういう行動をとる人間なのか」

そうした自己認識のもとになるのは、すべて過去の記憶なのです。だから過去の記憶を自ら捨てた人間に、アイデンティティは存在しない。その言動にも原則というものがまったくなくなってしまう。

明らかなウソをみんなが見ている場所で堂々と口にし、みんながそれをウソだとわかっているのに、恥ずかしいというそぶりを見せない。隣にいる仲のよい相棒と一緒に、なぜかニヤニヤ笑ったりしている。

主義主張はといえば、そのときそのときで、ただ強いものの言うことにはなんでも従うだけでコロコロと変わり、まったく一貫性というものがない。

そんな人間と、そして国家と、誰がまともにつきあおうと思うのでしょうか。